

第七話<大抜擢>

— こうしてTプロとアメリカのRプロとの日米合作を撮り終えたわたしに、Tプロから「次のマンを是非、瀬崎でやりたい」という一段高い場所にあったさらなる夢のような話を頂いたのであります。

少年時代のヒーロー“U”。あの子供達のヒーローに抜擢されてしまったのです。その時まで自分の中に鬱積していた芸能界に抱く暗い翳りの中から、その瞬間眩い光が放たれたと思いました。今度こそ、作品として自分の生涯に残るであろう仕事が巡り来たのだ！！

…今、思い返せばその時の感動は一バミューダーから還ってくるなり夢から醒めるように現実に戻されてゆく感覚をすっかり吹き飛ばすほどに力強い現実感を伴っていました。なにしろ自分の中に刻まれているヒーローなのだ！！きっと自分の演じる“U”もそれを観る少年にとっては生涯の思い出に残るに違いありませんでした。…“U”には、いつの時代であってもそんな存在であって欲しいという、作る側と見る側で創り上げた、力強い姿がありました。

頂いた話では、何年ぶりかの“U”だからTプロも相当に力を入れるらしい…とのことでまず、ゴリラの時のように全身の石膏取りから始まり（だったと思うが“U”の時は顔のみだったかもしれない）スーツはわたしの体にびたりと合わせた厚手のダイビング用で三着用意されました。

このスーツを身につけるときは海パン一つになり全身にベビーパウダーをまんべんなく擦り込みぴちぴちのスーツを指でつまみ上げながら潜り込ませてゆく。全身を潜り込ませたら大きく息を吸いながら胸を張って立ち上がり背中ジッパーを上げたところで“U”となるのだ。もはや—自分は自分でなくなり特撮の中のヒーローと化す。…知らなかった力がそこに漲るのでした……

制作がこの作品に込めたものとは、そのセットやカメラ技術の全てを一つの現場でぶつけ合いながら、CGは一切用いず、ものの質感に徹底的にこだわって作り上げたところにあります…と、そのお話を、先日(2010年7月)密かに“U80”の大ファンだったという友人から頂いた放映30周年記念番組“U80のすべて(スターチャンネル・ファミリー劇場、長谷川初範出演)”のDVD中で、特撮カメラマンであった方や、プロデューサーの方が熱く語っていらっしやるのを見て、そうだったのか！と納得しました…なにしろその作られた作り物の頑丈なこと、ビルなんか全力でぶつからないと全然壊れてくれないのですから—もしも失敗したら—一ヶ月も幾らも掛かって美術の方が作り上げた作品が、台無しになってしまうのです……特撮スタジオ(倉庫?)の横に累々と置かれた作りかけの模型やセットを見せて頂きながら責任感に震えてビルに飛び込んだのを、その時ふと思い出しておりました。

